生長して成年に達した頃からは、意志の力も強まるに隨て、遂に之を自由にすることが出來るやうになつて、恰も惡夢から目の覺たる如き感を得たといふことである。

學問と澁面

元來子供に、教育はむづかしい者だと思はせるのは最も忌むべき事である、抑も學問とは愉快なものではないか、それであるのに子供が學校へ行くと、何だか學問とは袴でも着たものゝやうだと子供に思はせるのは實に愚の極である、智識とは取りも直さず人の理解力を發達させるものである、子供が理解力の發達を喜ぶのは當然であらうと思ふ、種子は之を肥た土地に蒔いて、日光に良く當てゝ、善い實を結ばせねばならないのに、態々之を痩た土地に下して、態々日蔭に置く必要はあるまいと思ふ、最初から學問はむづかしいものだと云ふやうな感を子供に持たせるものは愚も亦甚しいものである。

もしも子供が愉快に、遊戯的の間に學問の趣味を解して、其の眞面目な、困難な仕事を心もちよく成し遂げると云ふ事を學んだならば、我こそは人生の成功者たらんと云ふ確信を抱くであらうと思ふ、それであるのに、未だ學問だとか、義務だとか云ふ事をよくも諒解しない子供に對して、中々困難だぞ、眞面目にしなければならないぞと云つて、先づ澁面をして見せるのは、折角子供が學問に引きつけられやうとする引力を中斷させてしまうのである、教育者たるものは此の引力を破らず、傷けず、間違はないやうに導いて、遊戯のうちに愉快に其の目的に向つて進ませるの必要があるであらうと思ふ。

第廿四章　兒童と合理的觀念

宗教史上の爭論

これは道理であるとか、之は不道理であるとか、之は理屈に合ふとか、彼は理屈に合はないとか云ふ觀念を子供に教育するのは誠に必要であるが、之も中々六ケしいものである、昔の歴史を研究して見ると、堂々たる宗教上の歴史にも矢張り之が爲に極端な爭を起して居る、彼の有名なルーテルやオーガスチンなどは、宗教上から理論理屈は取り去つて仕舞はねばならぬと云ふ説を立てゝ、宗教の奥義は則ち不道理のやうに人の頭に映ずるものであるが、之に一々理屈をつけて、論理學的に研究しやうどするのは、無理な注文である、宗教は不道理なるが故に余輩は之を信ずる也とは彼等の標榜する旗幟であつた、信仰も此處迄行くと何か一方に反對論者の起るのは自然の傾向である、果して新に合理派と云ふ一派が起つて、之が熾に反對を唱へ初めて、宗教はルーテル一派の唱ふるが如き性質のものではないと云ふので、總てを理論で解釋しやうと試みた結果、宗教上の奇蹟だとか、傳説だとか云ふものは勿論の事、形而上の事迄も理屈に合はないものは、ドシ〳〵之を排斥して終つた、彼等はバイブルは唯歴史上の記錄として信ずるが、其の中の奇蹟などは之を信じない、其の結果は文字の穿鑿に走り過ぎて、宗教上の眞理なるものを度外視するやうに成つた。

お伽噺と合理説

此の一派の説に從へば、兒童教育の上に効力のあるお伽噺なども、理

屈に合はぬと云ふので排斥せねばならぬ結果になるが、假へ其昔噺は理屈に合はぬからと云つて、重要な教訓の含んで居るものを棄る迄の必要はあるまいと思ふ、若し茲に一人の解剖學者が有つて、人間の生命の秘密を知りたいと云ふ目的から、生物の骨を刻み、肉を削ぎ、血を分析して見たら如何であらう、或は茲に一人の化學者が有つて、時計の針の動くのは誠に不思議だ、どんな秘密が潜むであらうかと云ふので、時計の内の齒車を取り出して、之を化學的に分解して見たら如何であらう、言ふ迄もなく其愚や及ぶ可からずであるが、總てを理論一天張で解釋しやうと極端に走り過ぎる結果は、或はこんな愚に等しい事に成るのである、之は宗教歴史上の一例であるが、古典學の研究をした歴史家のうちにも、曾ては又之と同樣な極端に走つた人達が有つた、其の人達はホーマーだとか、其他の昔噺を研究するに、理屈を以て一々解剖して、ホーマーなどの生命とも稱すべき所謂不可思議な神秘的な部分は總て之を取り除いて、殘りの物を單に歴史として研究するやうにした、折角の文學上の作物も、斯う云ふ風に研究されては誠に情ない次第である、其れと同じく、一國の爲に千辛萬苦したとか、親兄弟の爲に非常に困苦して子たるの道をつくしたとか、或は人の爲に斯う云ふ善い事をしたとか云ふ立派な昔噺を、理屈責にして皮を剝ぎ肉を取り血を絞つて、さあ骨だけ殘つたから之で善いと云ふやうにしたら、昔噺の價値は無くなつてしまふ、然し骨だけでも殘ればまだしもの事、時には其の骨組が惡いとか、骨組が曲つて居るとか云ふので、此迄も打壞されることがあるが、這麽極端主義は誠に困りものである。

お伽噺の本旨

元來昔噺は歴史的のものでもなければ、或は全く根據のないものもある、然し其の噺の内には何等かの理想を含んで居る、理想を含んで居ると云ふ以上は、其の理想は何等かの一定の形を備へた智識を含んで居るものであるから、子供が此の昔噺に依つて裨益する所は決して尠くない、否、實際歴史上の事實よりは却つて多いかも知れない、之は理屈責にして排斥運動をやるよりは、尚々皷吹したいものであるが、勿論不道理な慘酷なのは宜しくない、宗教上の爭に就ても先に記した二派のうちで、其の一方を捨てゝ一方のみを取ると云ふ極端論者には贊同することは出來ないが、兎に角道理と云ふものは人間に缺くべからざるものである、

若し人に道理の觀念が無かつたなら、殆んど禽獸と擇ぶ所はないであらうと思ふ、宗教にしても此の合理的の判斷力を持たないと、其の末は唯迷信に陷つてしまう、元來宗教と道理とは決して衝突すべきものではなく、宗教と科學、宗教と合理的思想とは共に衝突するものではないと思ふ、去れば道理は人生を導く明星と云はねばならない、これ無んば人は暗黑世界に迷ふものである、子供は色々な話を好くものであるが、若し不道理な噺を何處かで聞いて來て、それを面白さうに話したなら『那麽馬鹿げた事があるものか』と一言の下に刎ねつけるのは宜敷ない、其れよりは『お前はさう云ふ事が有ると思ひますか』と聞くのが善い、素より子供の頭は大人のやうに判斷力はないから、事實は事實として其の通りに信じて仕舞ふ、例へば天の使の繪を見るとか、惡魔の繪を見るとか、幽靈の繪を見るとかすると、實際世の中には左樣云ふものが有るか如

何かと云ふ事を判斷するよりは、矢張り見れば見た儘に信じてしまうものである。

お伽噺の教訓法

試に三才位の子供に『お前は天の使を見た事があるか』と訊ねると『其れは有ります』と答へる『何處で見たか』と聞くと『繪本で見ました』と單純に答へる、此頃の子供の頭には實際世の中に無いものも繪には畫けるものだと云ふ考がないのだ、天の使の繪を見ると、其れが天の使だと信じてしまう、然し左樣信じたからと云つて其の繪は嘘だ、此の世の中に那麽繪のやうなものは居ないのだ、など丶云ふ事を頭から言はないで、斯う云ふ場合には、世の中に居ないものなら居ないものだと云ふ考を起させ、繪は世の中に居ない者でも畫くものだと云ふ判斷力を起させるやうにしなければならないのである。

子供が不思議な噺を聞て來たとて、直に魔物や幽靈は無いものだと云て聞かせると、折角お伽噺の中に含まれて居る教訓までも棄て丶しまふ樣になるから、それよりか之はお噺であるから實際有つたことだか何だかと云ふやうなことは構はない方がよいと話して置くのが宜い、さうして置くと、何時か偶然のことで子供が其の噺を實驗するやうな場合に遭遇すると、忽ち成る程と云ふ經驗を得て、噺は噺、事實は事實、實際に無い事でも噺に作るものだと云ふ考を起して、噺と實際との區別を明に付ける事が出來るのである、斯う云ふ風にすると、子供は別段空想に走らずして噺の面白味を諒解するものである。

元來眞理と實在と云ふ事には差別が有つて、實在とは明瞭にして一點

疑ふべからざる存在物を指すもので、則ち歴史だとか、又は宇宙の大法則のあることを示す色々の物體は實在である、それなら眞理とは何かと云ふと、宇宙の大法則があると云ふ事を認識し、明に之を知るの智識である、而して道德界に於て、此の宇宙の大法則が與へる敎訓は、實際世の中に起る事柄よりは時としては餘程面白い噺を綴るものである、それ故、昔噺は實際の社會の事實と合はないやうに見へても、矢張り眞理は含み得るものである、子供は勿論此の實在と眞理、則ち歴史上の事實と、眞理との區別を容易に辨別することは出來ない、私の經驗によると、私の子供の一人は久しい間、事實の噺でなければいやだ、お伽噺などは事實の噺でないから聞きたくないと云ふので、色々な機械の發明や、苦心談などでなければ聞かなかつた、而して長い間、お伽噺のやうな詩的なものは嫌つて居たが、漸次に其の精神が解つて來て、終には之を聞くやうに成つたのである。

兒童の心的變化

親たるものは此の詩的な面白味を子供の心から破壞せずに、之を批判するの力を發達させるやうにせねばならない、子供は架空談を好むの餘り、迷信的に流れる傾向を示したり、或は餘りに之を批判するの結果、此の噺も、彼の噺も皆いやだ、皆嘘だと云ふやうになる事があるが、斯う極端に走つたからと云つて別段心配するには及ばない、子供の心理的發達と云ふものは千態萬狀で、右に行き、左に傾き、色々な經驗を經るうちに、見たり聞たりすることを消化して行くのであるから、親たるものは或時は子供が右に行き過ぎたとか、又或時は左に行き過ぎたとか、

一々心配するには當らないと思はれる。

お伽噺と宗教教育

お伽噺に於ける教育法は、宗教教育に於ても亦同樣で、親たる者は子供に自由の判斷力を養成せしむる爲には、何事によらず、苟も善事でさへあれば手當り次第其智識を得させるが宜いと思ふ、則ち宗教上の話も聞かせやうし、宗教上の儀式も見るが儘に任せて置くがよいが、前にも云つた通り、彼等の判斷力の自由には決して關涉してはならない。

小さな頭を早く宗教化させたいと云ふ考から、宗教と云ふ重い冠を冠らせなどするは甚善くないことである。

判斷力の養成は、輕々しく信ずるの弊を避る事が出來るが、世に處する上に於ては常にそれは實際眞理である乎、彼の人はああ云ふがあれが眞理であらう乎、彼の人は斯う信ずるがあれが果して眞理であらうかと云ふ風に、萬事判斷をさせるやうにするのが必要である。

ペテロと氷滑

私の小供で今年八才のが大分氷滑を上手にして居た、我を忘れて一切夢中であつたが、一度倒れてからと云ふものは最早夢中になることが出來なくなり、倒れると云ふことが怖く成つて來て、すつかり氷滑を廢てしまつた、其處で私は、それはお前に確信が足りないのだ、お前に氷滑は得意だと云ふ確信があつたなら、矢張り平氣で上手にやれる譯ではないか、と申しますと子供の言ふには、昔ペテロはガリラヤの海を渡れる

と云ふ信仰があつた爲に歩いて渡り初めたが、中途で若しや沈みはしまいかと云ふ恐怖が起つて、信仰が破れたため、沈み初めたと云ふ話がありますが、私はペテロが水の上を歩いたと云ふ事は信じません、けれど其の話の主意は善いと思ひます、と返答した事があつた、斯う云ふ批判力は最初の内は子供の頭に注入するのに困難であるが、次第々々に此の力を養成されるやうに成ると、之こそ後來處世の上に必要なものとなつて、自分は此れ々々の事は根底のない事で、到底其説は受入れ難いと思ひながらも、他人の斯うと信ずる所は、他人の信仰として他人の權利を尊重するやうに成るのである。

第廿五章　兒童の愛と相互の教育

不幸なる獨り子

世に獨むすこ、獨むすめと云ふものは、得て教育上誤られ易いものである、之は如何云ふ譯かと云へば、獨むすこ、獨むすめと云ふ以上は、姉もなければ妹もない、兄もなければ弟もない、所謂ほんの獨りものであるから、自然家庭に遊び仲間がないから喧嘩仲間もない、斯う云ふ仲間がないから、獨り子は遊び仲間や喧嘩仲間から教へられたり、教へたりする、兒童相ひ互ひの教訓を得ることが出來ないのである、此等の仲間がないから獨り子は或は頑固に成つたり、腕白に成つたりすることは少いかも知れないが、一方に於ては自然に因循に流れ、

優柔に陷り易い弊がある、之は子供のうちは何でもないやうに思はれるが、大きく成つてから、此の優柔不斷は誠に困りもので、ほんの鳥渡した他人の攻擊にも、忽ち辟易するやうに成るのである

喧嘩と實際教育

之に引換へて澤山子供があると、中々賑かで喧嘩爭論などは珍しくない、凡そどんな子供でも、放つて置いたら喧嘩をしないものは殆んどあるまいと思ふ、然し喧嘩をしたからと云つて、兩親は心配して子供の喧嘩に直ぐさま親が飛出すのは宜敷ない、子供が子供相應の喧嘩をして、別段あれなら怪我もあるまいと思はれる場合には、出來得る限り放任して置く方が宜いのである――勿論あぶないのに放擲して置けと云ふ意味ではないが――元來此の子供同志の爭と云ふものは、各自の利害關係の衝突から生ずるものであるから、子供の爲に實際教育としては之に優るものはないのである。

大となく小となく、他人の權利を尊重すると云ふ事は最も大切であるが、子供には這麼むづかしい事を口で云ふよりは、實際に經驗させるのが早道である、則ち他人の權利を侵害しやうとすると、其處に反對と云ふものが起つて來ると云ふ事を經驗させるには、子供の喧嘩は適切な實際教育である、其れ故、子供が喧嘩をしたからと云つて親は濫りに心配するには及ばない、子供同志が握り堅める拳には大切な道德的教育が含まれて居るのである。

敬愛と公私の注意

然し喧嘩は實際教育だからと云つて、態々之を勸めるには及ばない、

畢竟子供が喧嘩をしたからと云つて、親はそんなに驚くにも當らないと云ふ事を陳べた次第であるが、親たるものは子供同志に喧嘩などをさせるよりは、寧ろ互に相愛し、互に相尊敬すると云ふ事を教育するに努めねばならないのは勿論である、此の相敬愛すると云ふ風儀を養成しやうと思ふなら、親は多衆子供の居る前で、誰其れさんは悪いとか、何々さんは馬鹿だとか、云ふやうな事を假にも口外するのは禁物である、則ち外の子供の目の前で、一人の子供を悪ざまに詈るのは甚だ宜敷ない、其時はそれなりけりで濟んだとしても、何時しか之は現はれて來るもので、悪ざまに詈つた親は、最うそんな事は忘れてしまつた頃、其芽がだんだん吹出して、弟が兄を輕蔑したり、妹が姉を詈つたりすることがあるが、それは親が曾て子供の居る前で、兄を輕蔑したり、姉を詈つたりしたのを、弟なり妹なりが記憶して居るからである、子供の前では決して一方を上げたり、一方を下げたりして、他人を輕んじたり、嫌つたりするやうな思を起させず、飽迄も互に相敬愛すると云ふ事のみを教へねばならない、故に親たるものは、子供の集つた時や客人の前などでは、子供と雖も大人と餘り異ならない取扱をするやうに努めなければならないのである、若し子供に小言を云ふやうな必要があるとすれば、出來得る限り秘密にして而して其の小言を云ふにも、決して子供を侮辱するやうな小言の云ひ方をしてはならないのである。

手で打ち合をしないでも、子供は良く口先の喧嘩をするものであるが、小さな眼を剝いて「馬鹿やーい」などゝ云つた所で、之は大人の云ふやうな馬鹿の意味に深い意味はないのである、所が之が一旦親の口からでも出ようものなら、非常に怖ろしいものと成つて悪例を殘すのであるから充分に注意して頂きたい。

忍耐の養成

兄が玩具を持つて面白く遊んで居る所へ、突然弟が行つて、其れをさらつたなら、兄は勢ひ腹を立てゝ小さな者を打たうとする、斯う云ふ時は危險であるから親は兄の方を留めて、茲に忍耐と云ふものゝ味を嘗めさせてやらねばならない、之が若し四才位の姉と二才位の妹でゞも有つたなら、姉の方を靜になだめて『あら御覽なさい、〇〇さんはあなたの人形を持つて行つて如何する必算でせう、可笑いのね、お人形を倒に抱くお母さんがありませうか、〇〇さんは未だお人形の抱きやうを知らないのね、敎へて上げませうか、え、あなたは姉さんだから、よゝく敎へてお上げなさい』と云ふ風にすれば、初のうちは或は聞き入れない子供もあるであらうが、一度が二度、二度が三度となると、姉さんはとうとうお母さん氣取りに成つて、妹の亂暴を怒らないのみか、却つて親切に妹を取り扱ふやうに成るのである。

何にしても子供は面白さうに遊ぶからと云つて、全く遣り放しにして置くのは宜しくない、殊更少し危險と思ふ玩具でも持つてる時は、尙更注意を要するのであるが、左樣でもない時は自由に遊ばせて置かねばならないのである、而して氣儘に遊ぶうちに、色々の敎訓を互に得るやうにさせるのが必要である。

機會の利用

私は小さい折に幼な友達の誕生日に招待されて、レーナルド狐と云ふ

遊をした事があるが、其の友達は人を招待して置きながら、自分だけ善い子に成つて、賞品やら名譽やら總て自身に得やうとしたものであるから、終に子供仲間に不平が起つて一と騷動が持ち上つた、左樣すると其の父親が仲裁に這入つて、自分の子をたしなめて漸やく濟んだ事があつた、此の友達と云ふのは、這麼時に其の我儘をたしなめる母親がない上に、父親の獨り子息であつた、私は家へ歸つてから一部始終を兩親に話すと、兩親は客をよんだ以上は、其の主人公たるものは客に滿足させて愉快な感を起させねばならない、彼は誕生日の主人公と成つて、一日の名譽を總て一身に集めやうとした結果は、終に自分も面白くなければ、お客さんも面白からぬ考を起して仕舞つた、這麼ことをせずに、若し客を喜ばせる爲に自身が骨を折つたなら、友達仲間との友情も一層深くなれば、又客を招待した主旨をも達することが出來ると云ふ事を染みじみ

教訓された事があつた、之は實驗した一例に過ぎないが、親たるものは、總ての機會に於て子供の經驗を利用したならば、子供を自然に正しい道に導くことが出來るのである。

第廿六章　兒童の恐怖と教訓法

想像的恐怖心

子供は時としては自分の想像の爲に驚かされることがある、元來自分は弱い者であるから、若し怖いものが來たら如何して善いであらうかと云ふ風に感ずるために怖いと思ふと直ぐヒステリー性に陷るものである、若し這麼場合に逢つて、今怖いものが出て來て、自分では如何することも出來ない、怖い々々と思ふ時に、子供を如何したら善いであらうか。

這麼場合に逢つたなら、何も怖くはない、別に怖い者は來はしないと、頭からそれを打ち消しても少しも恐怖心を取り去ることは出來ない、這う云ふ時には、却つて最初のうちは子供の云ふ通り、矢張り怖いものが居ると假定する方が宜しい、而して子供の地位に身を置いて、徐ろに研究を初めるのであるが、這うすると子供は信頼の思を起して大人の言ふ事に從ふものである、一旦子供の信任を得て置いてから、其の怖いと云ふものを調べると、勿論詰らないもので怖しいも何も有つたものではない。

兒童の恐怖と取扱法

例を擧げて見ると、或る小さな女の子が、夜中に目を醒すと、虎が來るとか、熊が來たとか云つて怖がるのがあるが、之は食物の關係から惡夢に魘はれるのであらうが、夢を見て不圖眼をさますと壁に懸つてる着物の薄黑い影などを見て、それ熊が來たと云つて泣くのである、這麼場

合に叱るのは宜しくない、それよりは優しく取扱つて、其の怖いと云ふ着物から出來るだけ離れた所へ寢かすやうにして、靜に燈をつけて怖しいと云ふものが良く見へるやうにしてやる、少時さうしてから氣を落付かせて徐々『お前の怖いと云ふのは、彼れは着物の影ではないか』と云ふ事を先づ話してやる、それが腑に落ちたなら今度は『なんにもしない着物の影が熊に見へるなんツて可笑いぢやないか』と云ふ風に話をする左樣すると成る程つまらない事が怖かつたものだと云ふ考が起ると、子供は今迄の事を忽ち一笑に附して仕舞ふものである。

林中の實驗談

それから之は私の實驗した事であるが、或る冬の日に、一人の子供を伴れて林の中を歩いて居た、最う木の葉は落ちて淋しい景色であつたが、見ると一本の木が、太い蔓に卷きつけられて、何だか疲れた旅人が壞れた自轉車にでも寄りかゝつて居るやうに見へるのが有つた、子供がそれを見付けると非常に驚いて『あれ彼處に自轉車乘の怖い人が居る』と云つて其の木の方を指した、何さま子供の驚きやうは非常なもので、遁るにも遁られず、隱れるにも隱れられず、殆んど身の置き處に困つたと云ふ樣子であつた、何の怖い事はない、蔓の卷きついた木だと云つてしまへば其れで濟むやうなものゝ、然しそれでは子供の恐怖心を沈める事は出來ない、其處で私は先づ至極冷靜に搆へて居た、人は不思議なもので一人が冷靜に控へて居ると、其の傍の者もいつしか冷靜に復るものである、暫時冷靜に搆へて居た後、靜に其の谷に在る怖いと云ふ影を『ようく氣をつけて御覽よ』と云ひながら、子供を抱き上げた、而して彼の人

は木か何かの樣に風に少しゆれるきりで少しも動かないではないかと云つて聞かせると、漸て小供は落ついた樣子だから『彼の人の方へ行つて、何をして居るか見ようではないか』と云ふと、怖いからいやだ其れより早く遁げて歸らうと云ふのである、遁げて歸れば夫迄である、子供から怖しいと云ふ觀念を少しも取り去る事は出來ない、是非あれは人ではない木だと云ふ考を起させたいと思つたから、遠まわりをして例の木の方へ近寄ると、今度は今迄人のやうに見へて居たものが、全く一變して木のやうに見へて來た、が矢張り舊の如く木は少しも動かない、之を見ると子供は元氣を回復した樣子であつたから、此處ぞと思つて『私はどうもあれを人とは思はない、さあ、最つと傍へ行つて見やう』と云ふと、矢張り未だ慊だと云ふ、其れから今度は他の方面へ廻つて愈それは人ではない木であると云ふ事を一層確めさせた、最う先のやうなヒステリー性の恐怖心は無くなつて、唯蔓が木に卷きついてる樣子が何となく不可思議なので、それが怖しいのみと成つた、其處で此の恐怖心も取り去つてやらうと思つて、そろ〳〵木の方に近よつた、何か新しい恐怖心が起ると、其度毎に立ち留つて、それを解決するやうにしてやると、段々に怖くないと云ふ自信力が增して來た樣子であるから、最後に私は『怖しい人が唯一本の木に早換をするとは可笑いぢやないか、私は唯の木だと思ふがお前は如何思ふのか』と云ひきかせると、子供は最う疑もなくそれが唯の木だと云ふ事を全く悟ることが出來た、此處で子供の心理的の變化を調べると、最初は木を人と思ひ違へて驚いたが、其の驚は恐怖となり、恐怖が畏縮となり、畏縮から警戒となり、警戒して仔細に注意した結果は、今迄恐れて居たのが如何にも馬鹿らしいと云ふ風に成つて、終に笑ひ出すやうに成つたのである、最後に二人は其の木の傍へ行つて

大笑をしたのであるが、後に此の經驗を忘れないやうに、子供に度々話をして、何か不思議なものにでも出逢つたと思つたなら、先づ仔細に吟味せよ、而うしたならば怖いと思つたものは、丁度林の中の木のやうに詰らない物に成つて仕舞ふと云ふ事を、良く〳〵敎へてやつた。

兒童と豚

最う一つ同じ子供に就て異なつた經驗を得た事がある、いつもの通り畑を通ると、子供は豚に逢つて其の鳴聲に驚いて、牝牛や羊や豚の居る處へ伴れて行かうとしても如何しても行かなく成つた、之は一つ敎へ所だと思つたから、子供を抱き上げて、豚小屋の垣根の傍で小供が安全と思ふ所へ行つて、豚は人間を怖がるもので、例へ子供でも恐れないで之を追ふと直ぐ樣遁るものだと云ふ事を話して置いて、豚が垣根に近寄るとそれを追つて見せた、成る程豚は臆病な者だと云ふのが解つたらしいので、子供を下へおろして一本の棒を與へ、それを追つて見よと云ひきかせると中々初は聽なかつたが遂に片手は私に捉まりながら、近寄つて來る豚を追つた――初は小さなのを態々追ふやうにさせた――すると豚は意氣地なく遁げ出したので、子供は大得意に成つて、最う少しも怖ろしいと云ふ感を無くして終つた、此處で怖ろしいと云ふ觀念を取り去つたから、今度は反對に注意を加へる必要があると思つた、大人と一緒に來た時なら善いが、若し子供ばかりで來たときは、無暗にそんな大膽な事をしてはならない、豚は臆病なやうでも時には腹を立てると、あぶないものであるから、注意せよと云ひ聞かせた事があつた。

冷靜の教訓

子供に怖ろしいと云ふ觀念を起させたり、子供の前で怖ろしいと云ふやうな風をして見せたりせずに、子供が恐怖の想像を描くか、或は父兄が實際怖ろしい事に出逢つたとしても、決してあわてず騷がず、先づ氣を落ち付けて、冷靜に構へると云ふ事を教訓するのが肝要である。

心ない女中などは兎角鼠を怖がるもので、よくチユー〳〵が怖いなどゝ云つて子供をも嚇かすものであるが、之が爲に恐れなくも宜い鼠を恐れて困る事がある、幼い折から此の詰らない恐怖心は取り去らなければならないが、決して亂暴な方法で取り去らうとしてはいかない世には隨分危險なものもある特に日進月歩の世の中に在つては、子供ばかりではなく、大人でも不思議な事が有るものだと思ふことがいくらもある、況して子供の驚くのは無理もないから、前以て小供には、斯う云ふ場合に處する法と、沈着であれと云ふ事を教へるのを忘れてはならない。

恐怖と警戒

早い話が小供を散歩に伴て行くにしても、心に思ふ事を口に言て、此處彼處と歩き廻るのは何う云ふ譯であるとか、鐵道線路や往來を横斷る時に前後を顧るのは斯云ふ譯だとかと、色々危險のある事や、又それを避けなければならないことを知らせるが宜い、子供の心には斷えず警戒といふことを記憶させなければならない、取分け電氣の應用が益々發達して行く今日の社會に在つては、電氣は如何云ふものか位の事を子供に

知らせないのは不用心である、其れゆゑ、電燈か呼鈴でも家に引いて有つたなら、其の修繕の時にでも、電力のどんなものかを實驗させるが善い、極弱い電流ならは子供に手を觸れさせて、電氣を身體に通じさせると口頭の説明よりは電氣の怖るべき事が適切に諒解される、何も一々六ケ敷電氣作用の説明をするにも當らないが、先づ電氣とは這麽ものと云ふ事だけを知らせて置いて、其作用の説明などは後來成長の折を待つのが善いと思ふ、が這麽ことは一の規則として、子供の心に刻付けて置くがよい、それは甚麽ことがあつても、柱から下つて居る張金に觸れたり、地面に着いて居る張金を踏んだりしないことである、或は全く安全かも知れぬが、事によると恐ろしい電氣が傳はつて居るのかも知れないからである。

子供を製造所などへ伴れて行くのは良いと思ふが、機械の動いてるのに手を觸れると危險だ、殊に其の高く釣つて在る帶革へでも卷き込まれやうものならそれこそ大變だと云ふ事を説明して、長く釣つてある帶革などを見せると、成程危險の範圍は這麽に廣いのかと云ふ事を手取り早く合點する、或は鍛冶屋とか、凡て火の傍へ行つたなら決して鐵のものを蹈まないようにと小供に注意するがよい、鐵の燒いたのは外部が黑く成つて冷めたやうでも、中々あついものだと云ふ事を知らせる爲に、木の片でゞも其の鐵を押へると木は忽ち焦げて來る、左樣すれば子供は成る程燒いた鐵は冷めたやうでもあぶないものだと云ふのが良く合點されるのである。

警戒と臆病

斯う云ふと或は子供を臆病にしはせぬかと心配する人もあらうが、決

して其心配は無用である、子供が物を見て怖いと思つたなら、先づ其恐怖心を取り除いて置いて、扨よく〳〵教訓を與へるのであるが、それには(第一)子供にお前は勇敢でなければならないと云ふ事を教へ(第二)用心が大切であると云ふ二つの條項を教へるのが必要である。

第廿七章　サンタクロース

想像上の人

子供の發達して行く心理的狀態を見ると、或時代には自分の思ふものが、實際人間のやうな形を備へて此の世の中に存在するものだと信ずる時代がある。

西洋ではクリスマスの折に、サンタクロースと云ふ老人が來て、子供に色々の贈物をすると云ふことを言ひ傳へて居るが、子供は此のサンタクロースと云ふお爺さんが實際存在して居るのだと信ずる時代がある。

私は子供達に、サンタクロースとは實際生きてる人間ではない、それはお父さんや、お母さんや、おぢいさんや、おばあさんや、お友達など

が、クリスマスにお前達を喜ばせるために贈物をするので、言はゞ其れらの人々の愛を云ひ現はすのだと云ふ事を説明した、其説明だけは良く合點したが、夫れはそれとして矢張り別に一人のサンタクロースと云ふ老人が生きて居ると云ふ考をどうしても棄ることは出來ない、彼等はサンタクロースは善いお爺さんだ、大きく成つたら彼のやうな慈悲深い老人になりたいなどゝ云つて居るのである、或時子供は私に向つて、サンタクロースは何處の人で、どんなお店を持つてるでせうと質問したからサンタクロースとは架空的な者で、實際さう云ふ人が居るのではないと云ひきかせると、それはサンタクロースはお父さんやお母さんの愛を云ひ現はすと云ふことは解つてます、けれど私の聞きたいのは、其のサンタクロースでは無くつて、眞實のサンタクロースの事を話して頂きたいのですと言つた事がある。

お伽噺の破壞

此の時代には人間でもないものを人間だと思ふ事をどうしても避けることは出來ないのである、が之は子供ばかりではない隨分大人でも今日未だ這麽考を持つて居るものがあるから、此抽象的の者を人間扱にして話す必要は中々あるのである、教育家のうち或一派の人々は、お伽噺だとか、此のサンタクロースだとか云ふものは、兒童教育から取り除かうと主張する論者があるが、這麽昔噺のやうな古から言ひ傳へられて、遂に一の精神的存在物と成つたものが無いとしても、子供は子供相應な空想を描いて、理想上の人間を描き出すものであるから、這麽排斥論を唱道するよりは、善いお伽噺は之を奬勵して、お伽噺の英雄偉人が子供の

上に大なる感化を與へるやうにするのを希ふがよいと思ふ、お伽噺は其の時代時代に相應するやうに訂正しないといけない抔と一々心配する必要はあるまいと思はれる、子供がお伽噺の人物を覺束なくも想像するのは、之は自然であるから、彼れでは時代精神に合はない抔と云つて、折角子供の樂むものを打壞す必要はない、大きく成つたら最早お伽噺を迷信することはなく、只一の噺として之を過するやうに成るのである。

全體乳齒は拔け代るものであるが、拔け代るからと云つて無理にそれを拔き去る愚人はあるまいと思ふ、それと同じ理由で、子供の心に子供らしい考が一時宿るからと云つて、之は大變だと急いで拔き去るにも及ぶまい、それよりは後へ善い種を蒔く用意をして、古いものが無く成たら、新しい純潔なものを植へ付けるのが大切なのである。

地獄と極樂

サンタクロースは、親や友達の愛を云ひ現はすのだと知つて居ながらも、矢張り本當の者はロッキー山脈の中に住んで居て、鹿の橇に乘つて世界を廻るものだと子供が信ずるやうに、大人も亦宗教に關しては殆んど同樣の考を抱いて居るものがある――尤も我々人類の進化の有樣を顧みると、實際お伽噺のやうな時代は有つたに相違ないが――よく地獄極樂と云ふ事を云ふが、極樂へ行くと天女が優しい音樂を奏して居るとか、地獄へ行くと赤鬼青鬼が鐵の棒を持つて睨めて居るとか云ふのは一の比喩に過きない、地獄も極樂も人々の心の中に在ると云ふ事は萬々承知して居ても、矢張り此の世界の何處かに地獄と極樂とは實際在るのだと思

つて居る老人などが有るやうである、神と云ふ觀念でも其の通り、神は誰しも形のあるものだと思ふものはないが、矢張り或人は神と云へば人間のやうな生きたもので、何處か天の高い處に居て、宇宙を支配するものだと思ふ人がある、全體宗教に關して斯う云ふ考を抱くのは未だ幼稚なもので、宗教上に肉體の概念を加味して居るのであるから、精神上の信仰は未だ々々發達したと云ふことは出來ないのである。

蜃氣樓と天國談

或る博物學者が砂漠を通ると蜃氣樓が空中に現はれた、而うすると從者は非常に不思議がつて、あゝ綺麗な天國が現はれたと云つたから、學者先生は蜃氣樓の出現する理由を仔細に説明すると、從者は其れは御説明で光線の屈曲の工合と、空氣の乾燥の工合で蜃氣樓の現はれると云ふのは解りました、けれども左樣云ふ理屈が在るにしても、彼の蜃氣樓のやうな綺麗な平和な一の天國が實際何處かに在つて、其れが彼のやうに綺麗に映ると云ふことを打消す譯には行きますまい、終始變ることのない宇宙の法則と、不思議な宇宙の調和（ハーモニー）とは則ち神であると云てもよいでせう、とはいへ神は無形の者たると共に、又一方には矢張り一定の形を持つたもので、人間のやうに五感を備へて居るのだと私共は思ひます、尚一歩を進めて申せば、天國と地獄とは人の心の有樣を指したのだと云ひますが、矢張り此の世界の何處かに眼に見へる天國と地獄とが存在するだらうと思つてます、と答へたと云ふ話がある、斯うなると子供がサンタクロースと云ふ老人の居るのを信じたからと云つて笑ふ事は出來ないのである。

宗教的觀念の養成

全體宗教と云へば、神其れ自身を知ることで、教育家に取つては頗る困難であるが、確信もないのに子供に宗教の事を教へたり、又は神と云ふものは有るか無いか知らないとか、或は無神論者のやうに、神を信仰するのは三文の價値もないものだなどゝ教へるのは果して善い事であらうか。

子供に宗教上の觀念を抱かせやうと思つたなら、教育の任に當る人は、自分の考を注入しやうとするよりは、色々の儀式を見せたり、人の信仰の話を聞かせたりして、子供自身に質問を發するやうにするのが善い、例へば、神樣は在らつしやるものでせうかと質問したとするならば、何れ子供の神樣と云ふものは人間の眼には見へないが、空を舞ひあるく神樣で、大抵は畫か何かで見た想像の神樣である、其の時に、そんな神樣なんつて居るものかと頭ごなしに刻ねつけるのは無論よろしくない、先づそれよりはお前はどう考へるかと反問して、而して子供の說明を聞いた後、其の間違つたと思ふ所を注意するやうにすれば、子供は善く合點するものである、或は尙一歩を進めて、神樣は人間が、何處にどんな事を爲るのもちやんと見て居らつしやるでせうかと質問したとすれば、其れは、確にさうであると云ふのを會得させるには、之は神と云ふ觀念を餘程進ませてからでないと困難で有る。

今年やつと三才に成つた子供が、地球上の空氣は、地球を離るれば離れる程、稀薄に成つて、終いには全く空氣が無くなると云ふのを聞いて、大變に驚きながら、それでは神樣は死んでしまうだらうと云つて泣き出

した事がある、之は神樣は人間のやうな者で、天の高い處に居るものと思つたからである、それで私は、いや神樣は死ぬものではない、神樣は身體を持つても居なければ、肺も持つて居ない、神樣は人間のやうに呼吸して居るのではない、若し神樣が人間と同じやうなもので有つたら、其れは神樣ではない、神樣は則ち神樣であるから心配には及ばないと云ふ事を説明すると、漸やく安心した事があつた、斯う云ふ風に子供が質問して來たら、それに應じて適當に説明すると、漸次に相當の宗教上の智識を與へる事が出來るのである。

宗教教育と五大條項

宗教に關しては下に記す五の條項を教へたいと思ふ(第一)何にまれ善の行はれる所に現はれるものである(第二)神は善の源である(第三)神は人間のやうではなく、死せず、滅びず、永遠のものである(第四)神は無形のものであるが、何處にでも居ない所はない、而して神の善なるは勿論であるが、其の善たるや非常に大なるもので、善の中にも神は中々狎られない、畏こみ謹むべきものであると云ふこと(第五)人間は獨で居やうが、神の眼の前から離れることは出來ず、一擧手一投足は、一々神の眼に入るものであると云ふ五の條項を教へたい。

教育と敬神

苦い時の神だのみと云ふ事があるが、之は餘程信仰を輕蔑した話である、然し宗教上の教育を度外視した結果は、這麼窮策に陷るもので、とうぞ

お金が澤山出來ますやうにとか、娘の縹致が良くなりますやうに、などゝ途方もない願を神の前にする人があるが、斯う云ふ人達は元來神に祈ると云ふ祈禱の方法を知らないのだ、然し前に云つたやうに敎育せられた子供等は眞面目な祈禱の方法を知つて、飛んでもない願事などはしない子供になる事が出來るのである。

それから宗敎と云ふものは、世界統一ではなく、國々に依つて色々異つた宗敎があると云ふ事を知らせるのは必要であるが、それとても徒に彼の宗敎は善いが、此の宗敎は惡いと云ふやうな事は言はないで、唯色々の宗敎談をする樣にすれば、宗敎に關する子供の批判力を增すに大なる助となるのである、

祈禱とは何ぞや

神と云ふ觀念を正しく印象されると、其人は獨立の氣象に富み、精力に富んだ人となるが、若し間違つて印象されると、依賴心に富んだ迷信的の人物となるのである、曾て日淸戰爭の時、支那艦隊の司令官は之から戰爭が始まらうとする大切な場合に、態々司令塔から降りて來て、自分の一室に退き、窃に天に祈つたと云ふ話があるが、此は已に間違つた信仰である、自分が信ずる所に依つて之から事を爲さうとするに祈る必要はない、斯う云ふ人は自分が特別に願へば、神は特別に自然の理法を自分の爲に曲げて下さると云ふ間違つた信仰を持つて居るのである、然し祈願と云ふものは決して那麼ものではない、眞正の祈禱とは爲すべき

時に、爲すべき事を爲るのである、換言すれば人が義務を盡すのが取も直さず眞正の祈禱である。

子供は無神論者とするの必要もなければ、教理にのみ拘泥する宗教信者とするの必要もない、唯人生とは甚麼もの乎、人の歩むべき道は何れかと云ふのを教へ、批判力に富み、深思熟慮の氣風を養つたなら、それから先の宗教心の發達は子供自身の判斷力に一任することが安んじて出來るのである。

家庭に於ける兒童教育の **理論及び實際** 終

家庭に於ける兒童研究の 理論及實際

定價金七拾錢

明治四十五年五月廿二日印刷
明治四十五年五月廿五日發行

著者　石川弘
東京市麹町區麹町二丁目二番地

發行者　河本龜之助
東京市麹町區有樂町二丁目一番地

印刷者　中村政雄
右同所

印刷所　報文社

發行所　東京市麹町區麹町二丁目二番地
振替貯金口座東京二〇九一四番　洛陽堂

不許複製

高島平三郎先生著

三版出來

教育に應用したる

兒童研究

新版六百五十頁餘
總クロース天金箱入
定價金貳圓八拾錢
送料金拾貳錢

我國兒童心理學の泰斗高島先生空前の大著應用兒童研究出づ所說頗る明快幽玄の學理も極て平易何人も親しく先生の講演に接するの感あり教育者は固より苟も兒童を有する家庭は之に由りて一大寶典を得たり各種專門學校中師範高等女學校等教育實際家の好羅針就中玩具童話幼稚園の研究の如き眞に斯界の珍にして特に前人未發の卓見に饒めり

發行所 東京麹町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 **洛陽堂**

洛陽堂圖書目錄

（其一）

高島平三郎先生著
◎兒童を謳へる文學　定價壹圓　送料八錢

高島平三郎先生著
◎現代の傾向と心的革命　定價八拾錢　送料八拾錢

高島平三郎先生著
◎女の心　附錄　嫁と姑　定價四拾八錢　送料四錢

山本瀧之助先生著
◎地方青年團體　定價六拾錢　送料六錢

洛陽堂圖書目錄
（其二）

佛國哲學博士リギョール先生著
◎日本青年の將來　定價六六拾錢　送料六拾錢

下澤瑞世君著
◎英俊青少年發展史　定價五五拾錢　送料六拾錢

下澤瑞世君著
◎都會に於ける美的兒童研究　定價七七拾錢　送料八拾錢

志賀龍湖先生評註
◎北條時賴遺著人國記付遺訓　定價五五拾錢　送料六拾錢

洛陽堂圖書目錄
（其三）

西川光二郎先生著
◎惡人研究（悔悟遷善の事實）　定價五五拾錢　送料六拾錢

西川光二郎先生著
◎實踐道德簡易入門　定價四四拾五錢　送料六拾錢

石川弘先生編
◎泰西名家の手紙　定價五五拾錢　送料六拾錢

石川弘先生著
◎基督の青年訓　定價四四拾五錢　送料六拾錢

洛陽堂圖書目錄

（其　四）

荒浪清彦君著
◎國民處世鑑　付現代八大女流の修養觀　定價五拾錢　送料六拾錢

山口孤劍先生著
◎明治百傑傳　定價五拾錢　送料六拾錢

良民社編
◎地方青年の自覺　定價三拾五錢　送料四拾錢

良民社編
◎良民講話　英雄物語　定價三拾錢　送料四拾錢

洛陽堂圖書目錄

（其　五）

阿武信一君著
◎親と月夜　定價七錢（送料トモ）

柴田流星先生著　竹久夢二先生畫
◎少年實物教育　飛行器物語　定價貳拾八錢　送料四錢

柴田流星先生著　竹久夢二先生畫
◎殘されたる江戸　定價七拾錢　送料六錢

武者小路實篤君著
◎おめでたき人　定價六拾錢　送料六錢

洛陽堂圖書目錄
（其　六）

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　春の卷　定價八五拾錢　送料

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　夏の卷　定價八五拾錢　送料

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　秋の卷　定價八五拾錢　送料

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　冬の卷　定價八五拾錢　送料

洛陽堂圖書目錄
（其　七）

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　花の卷　定價四四拾錢　送料

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　旅の卷　定價六七拾錢　送料

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　野に山に　定價六七拾錢　送料

竹久夢二先生著
◎夢二畫集　都會の卷　定價八五拾錢　送料

231
69

洛陽堂圖書目錄

（其八）

竹久夢二先生著外四氏合著
◎都會スケッチ
定價五拾錢
送料六拾錢

竹久夢二先生著
◎サヨナラ
定價七拾錢
送料六拾錢

竹久夢二先生著
◎繪伽小供の國
定價三拾五錢
送料六錢

竹久夢二先生著
◎繪物語京人形
定價四拾錢
送料六拾錢

2

19

271
69

271
69
Ⓜ

048500−000−4

271−69

家庭に於ける児童教育の理論及び実際

ポール・ケーラス／著

M45

BEI−0042